

# 玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 59 回

## 同時代から見た頭山満

―書と人物―

③

隣町(福岡県糟屋郡粕屋町)の歴史資料館で『父と十年』という本の存在を教えられました。私教版で平成三年(一九九二)に発行されたものです。著者は安河内隆介氏。当時九十三歳

資料館の担当者はこの中に頭山満についての記述があるので、私に有用ではないかと考えて、その部分だけコピーしてくれました。私は全体を読んで見たいと考え、特別に借り出させてもらいました。頭山満のことも教えられるところがありました

が、驚いたことに隆介氏の父喜三は私の住む町(同郡須恵町)の出身でした。なぜ日米に別れて生きたのか、という事情も詳しく書かれています。私の住む町に生まれた原田喜三は、隣町の安河内家の婿養子になります。明治三十九年(一九〇六)、数え年三十四歳で渡米し、コシヨウ栽培で成功してコシヨウ王と呼ばれるまでにりました。カリフォルニア州サンディエゴ郡サンマール市に、その死後、功績を称えて、喜三の名を冠した道路があります。喜三はアメリカに移民し、日

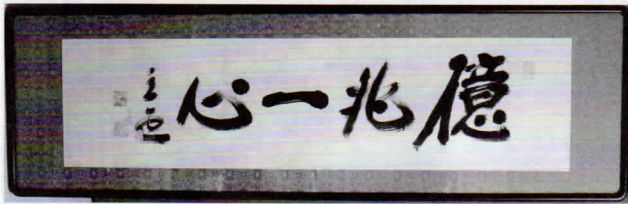


写真1 扁額「億兆一心」

系一世として生涯を全うしましたが、その子・隆介氏は中学修験館から早稲田大学に進み、富士紡績に入り、やがて太平洋戦争が始まり、喜三一家は他の日系人がそうであったように、収容所へ送られます。隆介氏は陸軍省からビルマに派遣されますが、輸送船が米軍に沈められ、九死に一生を得て帰還します。父と子が日米に別れ、敵対する国に引き裂かれて、共に運命に翻弄されていきます。さて、昭和十七年(一九四二)十月、富士紡の中津工場長をしていた隆介氏は「頭山先生の一行二十人が宇佐八幡宮に戦勝祈願され、耶馬溪に投宿されたことを知り」挨拶に行きます。福岡師範学校第一回卒業で、県下教育界の重鎮だった柴田文城という人物がいます。中野正剛と緒方竹虎が福岡師範付属小学校在学中、校長だった柴田の薫陶を受けたことはよく知られています。福岡教育大学付



写真2 関防印

属小中学校(西公園下)に柴田文城の銅像が建てられています。文城は、頭山満の姪の夫で、かつ、隆介氏の妻の伯父です。文城は隆介氏の妻の妹(実姪)を養女としていたので、形式的には、頭山満の義理の甥が文城、文城の養女の義兄が隆介氏となります。そんな関係で頭山と隆介氏は文城を介して面識がありました。突然の訪問に驚いた頭山に、ここで何をしているのか、と問われた隆介氏は、絹紡工場をしていますと答えました。正確に引用するところですが、「絹紡工場といいますが以前は屑繭がたくさん出るがそれを廃棄していたのを集荷し、これを原料にして処理して立派な絹織物に活用しています。このほか野蚕といって植物で直接育つものも集めています」

写真3 「立雲」の落款と姓名印(白文・雅号印「朱文」)



頭山は実は体調をくずしていたのですが、それでも工場見学を選びました。隆介氏が肩を抱えて歩調を合わせ、一時間ほど工場を視察する中で、いろいろな質問をしました。この時の印象を隆介氏は次のように書いています。「それまで単なる豪傑と考えていたことが間違いであることを知った。戦時下のわが国の産業経済をよく研究されていたからである。」

頭山の身近に接した人の、こういう感想が貴重です。そもそも隆介氏は戦後四十五年を経て、頭山の真価を知る人が少なくなったからと、この証言を残したのでした。「先生の真髄に触れることが出来たのは生

涯の大きな思い出の一つとなった」と述べています。翌日、隆介氏は会社で作った富士絹二反を持って、福岡市西新町の頭山の生家・筒井家を訪ねました(現在は西新プラリバ<旧・西新岩田屋>の敷地となつています)。頭山は六、七人の揮毫依頼に筆を執ろうとしませんでした(体調不良が続いていたためでしょう)。しかし、隆介氏が会社の講堂に一枚、私個人に一枚、扁額の揮毫をお願いすると申し出るのと、「先生は毅然として筆をとられ、ご令息方の介添えを受け、会社には「緘維報国」、私には「不動如山(動かざること山の如し)」と鮮かに大書して下さった」。頭山満は二年後に九十歳で亡くなりますが、八十八歳で旅行をするだけで

も、当時としては信じられないほどの頑健さと言えるでしょう。

富士紡中津工場講堂の頭山の額はいつたようなたてでしょうか。中津工場は火災で焼失し、残念ながら現存していません。

頭山の宇佐神宮参拝と中津工場見学は地元紙が詳しく報じているのではないかと思います。中津市立小幡記念図書館に問い合わせてみました。当時の大分合同新聞を調べてくれたのですが、該当する記事は見いだせませんでした。もう一方の額「不動如山」は、隆介氏のお子様である公二氏が、今も所蔵されているとのこと

※安河内公二様、粕屋町立歴史資料館、中津市立小幡記念図書館のご教示・ご協力に感謝します。

写真1は石瀧蔵の扁額「億兆一心」(立雲書)です。写真2は「億」の右肩に押された印(関防印または引首印)。何と書いてあるか読めないのがふつうですが、幸い藤本尚則著『頭山満翁写真伝』巻末に印譜を収めていて、印の由来を説

明しています。「以虚受人」と読み、印材は鯨の骨です。写真3は「立雲」の署名(竹筆の特徴が出ています)と、上が姓と名を記した白文印(陰刻)、下が雅号を記した朱文印(陽刻)です。この三顆の組み合わせが最も目にふれやすいもののように思います。

「写真説明」